



日本遺産

和装文化の足元を支え続ける



足袋蔵のまち行田

平成 29 年（2017）4 月 28 日に、行田足袋と足袋蔵のストーリー「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」が埼玉県初の日本遺産に認定されました。

日本遺産は、「日本各地の歴史的な魅力や特色を通じて、私たちの国の文化や伝統を語るストーリー」を、文化庁が「日本遺産」として認定するものです。そして、文化財が語る地域の魅力を、ストーリーと共に国内外へ積極的に発信することによって、自分たちの手で地域を元気にして行く取り組みでもあります。

日本遺産に認定された地域には、そのストーリーを語る上で欠かせない様々な文化財（構成文化財）があります。行田市の日本遺産にも足袋蔵など 45 件が構成文化財に認定されています。このガイドを手にも、行田市のストーリーと構成文化財をたどってみてください。

【国特別史跡】

① 埼玉古墳群



県内唯一の特別史跡。国宝「金錯銘鉄剣」が出土した稲荷山古墳など9基の大型古墳を中心とする東日本最大規模の古墳群。忍城水攻めの際には、石田三成率いる豊臣秀吉軍の本陣が、日本最大級の円墳である丸墓山古墳墳頂に置かれました。史跡と一体となった「さきたま史跡の博物館」もあります。

所在地：埼玉 56 他
史跡の博物館は 9:00 ~ 16:30 開館、入館料 200 円
TEL 048-559-1111
HP <http://www.sakitama-muse.spec.ed.jp>

【埼玉県指定旧跡】

② 忍城跡



15 世紀後半に成田氏によって築城され、城下町行田の発展の基礎となった城。沼地と河川を巧みに利用して築かれ、石田三成の水攻めにも耐え「浮城」、「水城」とも呼ばれました。小説・映画『のぼうの城』の舞台です。城跡には「行田市郷土博物館」があり、日本遺産の構成文化財もいくつか収蔵・展示されています。

所在地：本丸 17-23 他
郷土博物館は 9:00 ~ 16:30 開館、入館料 200 円
TEL 048-554-5911
HP <http://www.city.gyoda.lg.jp>

⑬ 足袋蔵まちづくり

ミュージアム（栗代蔵）



明治 39 年（1906）に建設された元栗原代八商店の土蔵造りの足袋蔵。現在は NPO 法人運営の観光案内所 & 日本遺産ガイドダンスセンターに再活用されており、足袋蔵や日本遺産についての情報を提供しています。日本遺産の構成文化財を見学の際には、まず初めにここに立ち寄って、足袋蔵の雰囲気を感じてください。

所在地：行田 5-15
10:00 ~ 16:00 開館、入館無料
TEL 048-552-1010
HP <https://www.tabigura.net/machidukuri.html>

行田市の日本遺産ストーリー ～行田足袋と足袋蔵の物語～

日本遺産は、ストーリーの概要、ストーリーの本文、ストーリーを構成（証明）する文化財群（構成文化財）、地域活性化計画で構成されています。行田市のストーリーの概要と本文は、次の通りです。

ストーリーの概要

忍城の城下町行田の裏通りを歩くと、時折ミシンの音が響き、土蔵、石蔵、モルタル蔵など多彩な足袋の倉庫「足袋蔵」が姿を現す。行田足袋の始まりは約三百年前。武士の妻たちの内職であった行田足袋は、やがて名産品として広く知れ渡り、最盛期には全国の約八割の足袋を生産するまでに発展した。それと共に明治時代後半から足袋蔵が次々と建てられていった。今も日本一の足袋産地として和装文化の足元を支え続ける行田には、多くの足袋蔵等歴史的建築物が残り、趣きある景観を形づくっている。

日本遺産ストーリー

関東平野の中央部に位置する行田市は、日本一の足袋生産地として知られ、足袋産業全盛期を偲ばせる足袋の倉庫「足袋蔵」が今も数多く残る“足袋蔵のまち”です。表通りに土蔵造りの見世蔵が建ち並ぶ“蔵のまち”は各地にあります。行田はそうした“蔵のまち”とは異なり、足袋蔵のほとんどが裏通りに建てられています。蔵の造りも土蔵造りだけでなく、石造、煉瓦造、モルタル造、鉄筋コンクリート造、木造と多彩です。いつどのようにして「足袋蔵の町並み」が形成されたのでしょうか。



足袋職人

足袋づくりの始まり

利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。

行田足袋については、「貞享年間亀屋某なる者専門に営業を創めたのに起こり」との伝承があり、享保年間（1716～1735）頃の「行田町絵図」に3軒の足袋屋が記されていることから、18世紀前半には生産が始まっていたと思われます。享保年間に忍藩主が藩士の婦女子に足袋づくりを奨励したとの伝説があるように、その後足袋づくりは盛んになり、明和2年（1765）の「東海木曾両道中懐宝



東海木曾両道中懐宝図鑑

図鑑」に「忍のさし足袋名産なり」と記されるまでに、広く知られるようになりました。足袋には株仲間がなく、取引が比較的自由に行えたことから、足袋づくりは益々盛んになり、天保年間（1830～1844）頃には27軒もの足袋屋が、行田のまちに軒を連ねるようになりました。

足袋産業の発展と足袋蔵の建設

近代に入ると足袋は大衆化して需要が拡大し、行田の足袋商人は東北地方や北海道に直接赴いてさらに販路を広げると共に、軍需用の足袋の生産にも携わり、他の産地を圧倒してゆきます。足袋づくりには作業工程ごとに専用の特殊ミシンが導入され、日露戦争の好景気を契機に足袋工場建設ブームが起こって、敷地の裏庭に工場が建てられてゆきます。

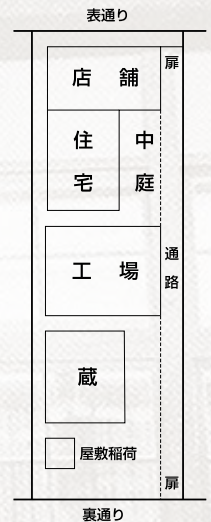
生産量が増えると、出荷が本格化する秋口まで製品を保管して置く倉庫として足袋蔵が必要になり、既存の土蔵の転用と共に、敷地の一番奥に足袋蔵が数多く建てられるようになりました。

石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田は、近世前半に城と城下町の整備が行われ、間口の広さに応じて各家に税が課せられたので、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されていました。近世の行田は、鴻巣・吹上から館林へと続く館林道・日光脇往還の宿場でもあったので、馬の世話を行なう裏庭

とそこに通じる路地が家々の間に設けられていましたが、近代になって馬の世話の必要がなくなり、遊休化した裏庭に足袋工場と足袋蔵が建てられていったのです。

こうして短冊形の敷地に、北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりと言った防火・防寒対策を施した店舗・住宅、接客用の中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稲荷が表から列状に並ぶ、足袋商店特有の建物配置が形作られました。

行田の足袋蔵は、遅くとも江戸時代後期頃には建てられ始めていたようで、弘化3年（1846）の大火の際に足袋蔵が延焼を食い止めています。足袋蔵は商品や原料を扱いやすいよう壁面に多くの柱を建てて中央の柱を少なくし、床を高くして床下の通気性を高めるなど、内部の造りに特徴があります。足袋蔵の建設が本格化する明治30年代頃までは、純和風の土蔵が建てられていましたが、明治時代末頃からは土蔵の小屋組みに洋風建築技術が導入され、土蔵だけでなく石蔵も建てられるようになりました。大正時代に入ると大型の足袋蔵も建てられるようになり、大正時代末には鉄骨煉瓦造の足袋蔵が現われました。昭和に入ると鉄筋コンクリート造、モルタル造、木造の足袋蔵も現れ、大小様々な多種多様の足袋蔵が昭和戦前期には建てられました。戦後は木材不足から石蔵が主流となり、昭和30年代前半まで足袋蔵の建設は続けられました。



足袋商店の建物配置



足袋蔵（保泉蔵）

行田の足袋蔵が他の“蔵のまち”と違って多種多様であるのは、このように100年以上もの永きに渡って、新しい建築様式を取り入れながら足袋蔵が建てられ続けたからなのです。そしてその背景には、生産量が増加しても企業統合等による大企業化には進まず、逆のれん分けして次第に足袋商店と足袋蔵が増加、ピーク時には200社以上の中・小規模の足袋商店が共存して一大産地を形成していた、行田の足袋産業ならではの特色があったのです。

日本一の足袋のまち

東北・北海道に販路を伸ばした行田の足袋商店は、「力弥足袋商店」なら八戸、「道風足袋商店」なら尾去沢鉦山といったように、問屋を通さずに各々が地域単位で独占的な販売網を築き、協調しながら販路をやがて全国そして海外へと広げて行きました。この頃の行田の人々は、老若男女を問わず皆が寝食を惜しんで工場や家庭で足袋づくりに励み、まち全体にミシンの音が響き渡っていました。寸暇を惜しんで働く女工さんの間で、手軽に食べられるおやつとしてお好み焼きに似た「フライ」、おからのコロッケとも言える「ゼリーフライ」が流行し、地域の食文化として定着しました。

また、販売先への手土産として奈良漬が好まれ、行田の名物となりました。

こうして最盛期の昭和13～14年には、全国の約8割の足袋を生産する日本一の産地となり、『行田音頭』の歌詞に「足袋の行田を想い出す」とあるように、「足袋の行田か行田の足袋か」と謳われる“日本一の足袋のまち”になったのです。



昭和初期の足袋工場

継承され発展する足袋蔵のまち

靴下が普及した現在も、行田では足袋の生産が続けられており、日本一の産地として新製品を国内外へと発信し続け、「足袋と言えば行田」と多くの方に親しまれています。

足袋産業で繁栄していたことを象徴する多種多様な足袋蔵も約80棟が現存し、時折流れるミシンの音と共に、裏通りに趣きのある足袋蔵のまち並みを形成しています。そしてその再活用が、まちに新たな彩りを加え始めています。



イベント時の牧野本店前の賑わい

行田市の ストーリーの 構成文化財

行田市の日本遺産ストーリーを構成（証明）する文化財群（構成文化財）は45件で、内訳は史跡4件（国特別史跡1・県指定2・市指定1）、有形文化財（古文書）5件、建造物29件（内市指定1・国登録5、総棟数58棟）、有形民俗文化財2件（内国指定1）、無形民俗文化財5件となっています（番号が赤色の構成文化財が史跡、緑色が有形文化財、紺色が建造物、青色が有形民俗文化財、茶色が無形民俗文化財）。

構成文化財の中心となるのは足袋蔵などの足袋産業関連の建造物で、足袋蔵まちづくりミュージアム（日本遺産ガイダンスセンター）、足袋とくらしの博物館、旧忍町信用組合店舗（Vert Café）、藍染体験工房「牧禎舎」など、再活用されて建物内部の見学ができる構成文化財もあります。また、十万石ふくさや行田本店店舗、Café 閑居、パン工房 KURA、旧小川忠次郎店舗及び主屋（忠次郎蔵）、奥貫蔵（あんど）など再活用されて、飲食店として利用できる構成文化財もあります。

そのほかにも県内唯一の特別史跡である埼玉古墳群、城址公園が整備されている忍城跡、その忍城跡にある行田市郷土博物館に展示されている国重要有形民俗文化財の行田の足袋製造用具及び関係資料、B級グルメのフライとゼリーフライ、行田の奈良漬など魅力的な構成文化財が目白押しです。

ぜひ、ゆっくりと構成文化財を巡って観て、味わってください。

足袋を履いて 足袋蔵を旅して みませんか？



【埼玉県指定史跡】

3 石田堤



石田三成率いる豊臣秀吉軍が忍城を水攻めするために自然堤防上に築いた堤。延長約14Kmの堤と推測されていますが、現在は大半が失われ、堤根地区の282mが文化財指定されています。隣接して「石田堤歴史の広場」もあります（駐車場あり）。

所在地：堤根字代官田通地内

【行田市指定史跡】

4 高橋家の芭蕉句碑



個人宅の庭にある「名月の花かと見えて綿ばたけ」の句を刻んだ芭蕉句碑。碑が建立された明治9年(1866)頃には、この地域で足袋の布地の原料となる綿の生産が盛んであったことがわかります。

所在地：野 795

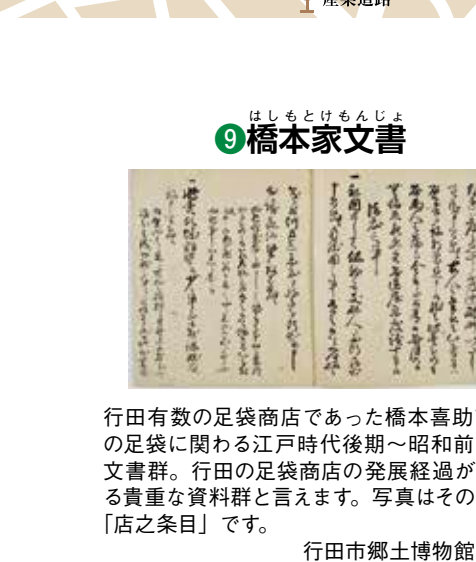
*見学の際に一言断って見学ください

5 慶長17年武蔵国酒巻村年貢割付状



慶長17年(1612)の酒巻村の年貢割付状。畑の年貢として木綿が書き上げられ、江戸時代初期にすでに行田市域で木綿が栽培されていたことがわかります。

行田市郷土博物館所蔵



日本遺産構成文化財所在地MAP2



- ### 地図の見方
- 日本遺産構成文化財
 - P 駐車場
 - WC お手洗い
 - 市内循環路線バス停留所
 - 路線バス停留所
 - 足袋販売店
 - ▲ フライ店
 - ゼリーフライ店
 - ◆ フライとゼリーフライ店
 - 奈良漬店

- 〈構成文化財への公共交通〉
- 1 埼玉古墳群は市内循環バス観光拠点コースの埼玉古墳公園前バス停留所下車すぐ、もしくは朝日自動車バス産業道路バス停留所下車徒歩15分
 - 3 石田堤は市内循環バス東循環コース堤根農村センター前バス停留所下車徒歩7分
 - 4 高橋家の芭蕉句碑は市内循環バス東循環コース野文化センター入口バス停留所下車徒歩3分

6 享保年間行田町絵図



行田市郷土博物館所蔵の享保年間（1716～1735）頃の行田町の絵図。この絵図には3軒の足袋屋が記載されていて、この時期にはすでに行田で足袋づくりが始まっていたことが伺えます。

行田市郷土博物館所蔵

7 秋山家文書



享保17年（1732）創業と伝えられる行田町有数の老舗足袋商高砂屋を営んでいた秋山家に伝来した文書群。江戸時代後期の足袋製造や経営を知るうえで貴重な資料です。写真は中の「奥州須賀川かど屋足袋代金年賦証文」です。

行田市郷土博物館所蔵

8 天保年間行田町絵図



天保年間（1830～1844）頃の行田町の絵図。27軒の足袋屋が記載されており、当時の行田町で足袋屋が他のどの業種よりも軒数が多くなっている状況がわかる絵図です。

行田市郷土博物館所蔵

9 橋本家文書



行田有数の足袋商店であった橋本喜助商店の足袋に関わる江戸時代後期～昭和前期の文書群。行田の足袋商店の発展経過が伺える貴重な資料群と言えます。写真は中の「店之条目」です。

行田市郷土博物館所蔵

10 大澤久右衛門家住宅・土蔵



江戸時代の行田町最大の豪商であった藍染の綿布問屋の江戸時代後期建設と思われる住宅と土蔵。土蔵は現存する最古の足袋蔵で、弘化3年（1846）の大火の際には、この2棟他の建造物が延焼を食い止めました。

所在地：行田 5-33
*外観見学のみ

11 森家土蔵・古蛙庵



嘉永3年（1850）と明治45年（1912）棟上の2棟の土蔵（足袋蔵）。前者は既存の土蔵を明治時代に足袋蔵に転用したもので、現在は私的な民芸館「古蛙庵」として活用されています。

所在地：行田 21-12
*外観見学のみ

ほずみぐら
12 保泉蔵



元行田随一の足袋原料商店の昭和元年(1926)建設の石造の店蔵・主屋、明治後期と大正5年(1916)建設の土蔵、昭和7年(1932)棟上の石蔵、昭和戦前期建設のモルタル蔵。敷地東側に一列に並ぶ蔵並みは圧巻です。
所在地：行田 5-8
*外観見学のみ

ときたけじゅうたく ときたぐら
15 時田家住宅・時田蔵



元時田啓左衛門商店の昭和15～16年頃建設の和洋折衷住宅、明治36年(1903)竣工と大正初期頃建設の2棟の土蔵(足袋蔵)。足袋蔵は、行田市内では珍しい袖蔵形式で、蓮華寺通りのアイストップになっています。
所在地：忍 1-5-25
*外観見学のみ

19 イサミコーポレーション
スクール工場・事務所・土蔵
・モルタル蔵・木造倉庫



イサミコーポレーションの大正6年(1917)建設のノコギリ屋根の旧足袋工場、翌年建設の事務所、大正～昭和初期頃建設の工場(元講堂・寄宿舎・食堂)、土蔵、木造倉庫、昭和13年(1938)棟上のモルタル蔵(全て足袋蔵)。大規模足袋工場の典型例です。
所在地：旭町 4-1
*原則として外観見学のみ
*モルタル蔵の公開については要相談

【国登録建造物】

きゅうおがわちゅうじろうしょううてんぼおよ しゅや
22 旧小川忠次郎商店店舗及び主屋



足袋原料を扱った小川忠次郎商店が大正14年(1925)に棟上した店蔵・主屋。商工会議所によって足袋蔵再活用モデルケースとして再活用が図られ、現在はNPO運営の蕎麦店「忠次郎蔵」となっています。
所在地：忍 1-4-6
*店舗利用以外は外観見学のみ
TEL048-556-9988、HP <http://chujiro.chu.jp>

【国登録建造物】

じゅうまんぐく きょうだほんてんてんぼ
13 十方石ふくさや行田本店店舗



明治16年(1883)棟上の元山田呉服店の重厚かつ豪華な店蔵。後に足袋蔵に転用され、現在は埼玉県を代表する和菓子店の店舗となっています。他の足袋蔵にはない「なまこ壁」は、改修の際に追加されたものです。
所在地：行田 20-15
*店舗利用以外は外観見学のみ
TEL048-556-1285
HP <https://www.jumangoku.co.jp>

かんきょ たびぐら
17 Café 閑居・足袋蔵ギャラリー
リー門・パン工房 KURA・
クチキ建築設計事務所・土蔵



元奥貫忠吉商店の昭和5年(1930)棟上の住宅、明治43年(1910)棟上・大正5年(1916)棟上の洋小屋の土蔵3棟と建築年代不明の土蔵(いずれも足袋蔵)。市内唯一の3階建ての蔵など大半が再活用されています。
所在地：行田 7-3
*店舗利用が催事開催以外は公道からの外観見学のみ
Café 閑居：TEL048-556-2052
HP www.cafe-kankyo.com
パン工房 KURA：TEL048-556-6373
HP <https://www.facebook.com/pankoubouKURA>

たしろぐら
20 田代蔵



元田代鐘助商店の大正時代建設の住居と土蔵(足袋蔵)、昭和2年(1927)建設の店蔵・主屋と土蔵(足袋蔵)の4棟が、江戸時代に形成された短冊形の敷地に、一列に並んで建てられています。
所在地：行田 6-9
*外観見学のみ

おくぬきげどぞう
23 奥貫家土蔵



大正時代の建設と伝えられる元奥貫忠吉商店の土蔵(足袋蔵)。同商店は市内数ヶ所に工場や足袋蔵を所有していましたが、この足袋蔵は同商店が昭和10年(1935)に既存の蔵を譲り受けて足袋蔵としたものです。
所在地：天満 3-35
*外観見学のみ

まきのほんてんみせぐら しゅや どぞう
14 牧野本店店蔵・主屋・土蔵
たび 足袋とくらしの博物館



大正13年(1924)棟上の豪華な店蔵・主屋、明治32年(1899)棟上と建築年代不明の2棟の土蔵(足袋蔵)、大正11年(1922)棟上の足袋工場が残る元足袋商店の建物群。全盛期の足袋商店の様相がわかる建物群です。
所在地：行田 1-2
*牧野本店は店舗利用以外は外観見学のみ
*足袋とくらしの博物館は土日の10:00～15:00開館
入館料：200円 TEL048-556-5171
HP <https://www.tabigura.net/tabihaku.html>

【国登録建造物】

おおさわけいじゅうたくきゅうぶんこくら
18 大澤家住宅旧文庫蔵
・住宅・土蔵



行田の足袋産業発展に尽力した大澤商店の7代大澤専蔵が大正15年(1926)に竣工させた行田市唯一のレンガ蔵(足袋蔵)と昭和3年(1928)竣工の店舗併用住宅。共に7代専蔵の普請道楽振りが伺える見事な建物です。奥に明治末頃建設の土蔵(足袋蔵)もあります。
所在地：行田 9-5
*外観見学のみ

【行田市指定建造物】

きゅうおしまちしんようくみあいてんぼ
21 旧忍町信用組合店舗



大正11年(1922)建設の木造洋風銀行店舗。足袋商店主たちが出資して創業した地元金融機関の創業時の店舗で、足袋産業の発展を支えました。市内では数少ない洋風木造建築としても貴重な存在です。館内で市民団体が「Vert Café」を運営しています。
所在地：水城公園 2305
* 11:00～16:00開館 TEL048-556-4330
HP oshimachicafe.main.jp

おくぬきぐら
24 奥貫蔵 (あんど)



奥貫忠吉商店が大正～昭和初期に建設した大型の土蔵(足袋蔵)。現在は蕎麦店「あんど」として再活用されています。かつては周辺に足袋工場や足袋蔵が建ち並んでいましたが、その大半が姿を消してしまいました。
所在地：天満 3-13
*店舗利用以外は外観見学のみ
TEL048-553-3110、HP <http://www.soba-and.com>

ぎょうだがま
25 行田窯



荒井八郎商店が昭和初期頃に建設した元足袋原料倉庫。曳家され、約1/3の大きさになって陶芸窯として近年まで再活用されていました。現存する数少ない木造の足袋蔵として貴重な存在です。

所在地：佐間 1-11-8
*外観見学のみ

くじらいけそうこ
26 鯨井家倉庫



昭和3年(1928)に建設された鉄筋コンクリート造の元足袋原料倉庫(足袋蔵)。陸屋根の小型の足袋蔵ですが、現存する市内で数少ない戦前の鉄筋コンクリート造の足袋蔵として貴重な存在です。

所在地：天満 1-43
*外観見学のみ

たびこうじょう
27 イサミコーポレーション足袋工場



イサミコーポレーションの昭和初期の建設と思われるノコギリ屋根の木造洋風足袋工場。足袋生産の拡大で、大規模工場が郊外に建てられていった昭和初期の行田を代表する大型足袋工場です。

所在地：向町 4-31
*外観見学のみ

ときたたびぐら
28 時田足袋蔵



元時田啓左衛門商店の昭和4年(1929)棟上の大型の土蔵(足袋蔵)。足袋産業の発展を反映した大型の足袋蔵ですが、古材を再利用するなど、建設費の節減が図られており、堅実な足袋商店の姿勢が伺えます。

所在地：忍 1-3-29
*外観見学のみ

かさはらけじゅうたく
29 笠原家住宅



昭和6年(1931)建設と伝えられる元足袋商店の店舗併用住宅。その後足袋卸売販売商の店舗併用住宅、旅館、バーと用途が変わり、現在は住宅となっています。昭和戦前期の姿を良く留めています。

所在地：行田 18-19
*外観見学のみ

【国登録建造物】

むさしのぎんこうぎょうだしてんぽ
30 武蔵野銀行行田支店店舗



足袋産業の資金面を支えた忍貯金銀行が昭和9年(1934)に竣工させた本格的銀行建築の店舗。戦後は足袋会館(足袋組合事務所)となり、行幸で昭和天皇も訪れています。現在は武蔵野銀行店舗となっています。

所在地：行田 4-5
*店舗利用以外は外観見学のみ

【国登録建造物】

きゅうあらいはちろうしょうてんじむしよけん
31 旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館



行田足袋被服工業組合の理事長を務めた荒井八郎が昭和12年(1937)に棟上した事務所兼主屋等3棟。「足袋御殿」とも呼ばれ、地域の迎賓館としての役割も果たしました。大広間棟前の庭園「成趣園」も見事です。

所在地：佐間 1-11-22
*外観見学のみ

あいぞめたいけんこうぼう まきていしゃ
32 藍染体験工房「牧禎舎」



昭和15年(1940)竣工の元牧禎商店の事務所兼住宅と足袋被服工場。現在はNPO運営のアーティストシェア工房&藍染体験施設となっています。元工場部分では不定期ながら様々なイベントも開催されています。

所在地：忍 1-4-11
*藍染体験工房は日曜のみ開館
TEL048-553-5800、HP <https://www.tabigura.net/makitei.html>

こばやしけじゅうたく
33 小林家住宅



昭和16年(1941)建設と伝えられる足袋原料問屋の隠居住宅。行田の足袋商店はしばしば別宅を持っていましたが、この隠居住宅は、和風建築と洋風建築が複合された珍しい建築となっています。

所在地：天満 1-38
*外観見学のみ

がくやたびぐら
34 楽屋足袋蔵



昭和20年代後半の建設と伝えられる楽屋足袋(ガクヤ株式会社)の石蔵(足袋蔵)。深い下屋を持つ長い石壁と一体となって建てられています。戦後の行田を代表する足袋蔵のひとつです。

所在地：宮本 5-18
*外観見学のみ

こうしぐら
35 孝子蔵



大木末吉商店が昭和26年(1951)に棟上した石蔵(足袋蔵)。建設当時は木材不足で、そうしたことから極力木材を使わずに建設されています。戦後の行田を代表する足袋蔵と言えます。

所在地：行田 6-9
*外観見学のみ

くりはらけ
36 栗原家モルタル蔵



昭和28年(1953)に館林市の農家の米蔵を移築した元福力足袋有限会社のモルタル蔵(足袋蔵)。数少ない戦後の移築転用された足袋蔵です。近年改修が行われ、外観が綺麗に整備されています。

所在地：天満 4-12
*外観見学のみ

こぬまぐら
37 小沼蔵



昭和 29 年 (1954) 頃建設の元豊年足袋本舗の石蔵 (足袋蔵)。この年にナイロン靴下の量産が始まり、足袋の需要は減少して行きます。足袋産業の最後の栄華を伝える足袋蔵と言えます。

所在地：向町 4-15
*外観見学のみ

くさおぐら
38 草生蔵



昭和 30 年 (1933) 頃建設の元金楽足袋株式会社の石蔵 (足袋蔵)。1・2階境の胴差部分に使われている稲石が洋風建築のようなアクセントを創り出していて、美しい外観となっています。

所在地：天満 7-26
*外観見学のみ

【国重要有形民俗文化財】
ぎょうだ たびせいぞうようぐおよ
39 行田の足袋製造用具及び
かんげいしりょう
関係資料



行田市郷土博物館所蔵の行田足袋の製造が手縫いから機械化へ変化していく変遷を示す貴重な資料 5484 点。長年に渡って博物館が収集して来た行田足袋に関する多彩な資料がまとめて文化財指定されています。

行田市郷土博物館所蔵

ぎょうだたび
40 行田足袋



行田に本社を置く足袋商店が製造する足袋。地域ブランドとして多方面に発信しています。古くから行田産の足袋は「行田足袋」として親しまれていましたが、近年ロゴ・マークが作られ、発信力が強化されました。

43 ゼリーフライ (文化庁 百年フード)



おからとジャガイモを混ぜて揚げたコロッケに似た郷土料理。足袋工場に勤める人々におやつとして愛されています。フライと共に市を代表する B 級グルメとして市外でも知名度が上がって来ています。

はつうまつ
41 初午祭り



弘化 3 年 (1846) の大火を契機に行田町周辺で始まった火除けの祭礼。天満稲荷神社と市中心市街地の各家の足袋蔵の脇にある屋敷稲荷で執り行われており、足袋蔵と共に行田の裏通りの景観を形づくる風物誌となっています。

ぎょうだならづけ
44 行田の奈良漬



足袋商店が得意先への贈答品の定番として愛用している行田の奈良漬。足袋産業全盛期には、足袋商店の店先に漬物樽が持ち込まれ、そこで漬けて持ち出されていました。

42 フライ (文化庁 百年フード)



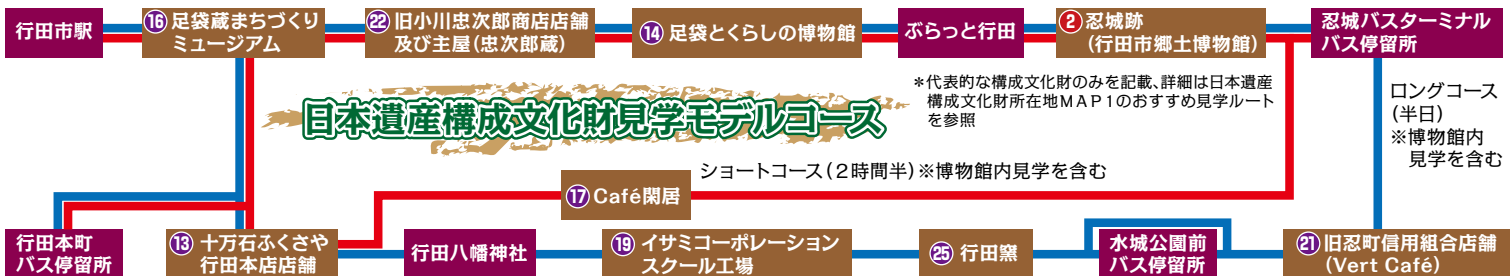
小麦粉を溶いてねぎを入れ、薄く延ばして焼き上げたお好み焼きに似た郷土料理。足袋工場に勤める女工さんのおやつとして普及しました。市を代表する B 級グルメで、ソース味としょうゆ味の 2 種類があります。

ぎょうだおんど
45 行田音頭



行田の足袋産業が不景気にあえいだ昭和 9 年 (1934) に、当時の忍町長の発案で不景気を吹き飛ばそうと西條八十、中山晋平に依頼して制作された音頭。「足袋の行田を思い出す」等、歌詞にも足袋が歌われています。水城公園東側園地に歌碑があります。

所在地 (歌碑)：水城公園 2305



- ◇JR上越新幹線・高崎線「熊谷駅」より秩父鉄道線で「行田市駅」下車
 - ◇JR高崎線「行田駅」より市内循環バスで忍城バスターミナルもしくは水城公園前バス停留所下車
 - ◇JR高崎線「吹上駅」より朝日バス行田折り返し場行きで、行田本町バス停留所下車
- *バスターミナル観光案内所、JR行田駅前観光案内所、観光情報館ぶらっと♪ぎょうだで観光レンタサイクルの貸出を行っています。



日本遺産HP



たびたび行田アプリ

○このパンフレットに関すること、行田市の日本遺産のストーリーや構成文化財についてのお問合せ
行田市教育委員会 文化財保護課 TEL048-553-3581 <http://www.city.gyoda.lg.jp>